OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	がんとの共生
Author(s)	石蔵, 文信
Citation	未来共創. 2021, 8, p. 346-348
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

がんとの共生

石蔵 文信

未来共創センターセンター長の山中浩司教授より共生に関してのコラムを依頼されました。私にとっては実にタイムリーなコラムです。昨年末より体調が悪く、徐々に食事が取れなくなってきました。あまりにも疲れやすいので、血液検査をしたところ骨に関するデータが異常値を示していました。その後に画像検査をしても原因がわかりませんでした。最終的に全身CTで前立腺にがんが見つかりました。さらに詳しい検査をすると全身の骨に転移していました。さらに前立腺がんの指標であるPSAが2000ng/mlを超え（正常は4以下）かなり深刻な状況で、5月の連休までもたないような気がしました。奇妙なことに寝ていると幼い頃の夢ばかりを見るのです。いよいよお迎えも近いと思い終活を急ぎました。遺産の件や葬儀の件などは1週間もあれば充分でした。

早速、泌尿器科で診察をしてもらい、1日入院して受けた細胞の検査でもかなり悪性度が高いことがわかりました。全身に転移していますので手術や放射線療法の適応ではなく、唯一の方法はホルモン治療です。前立腺がんは男性ホルモンの影響が強いために、男性ホルモンを押さえ込む治療です。まず注射で脳下垂体から出る前立腺ホルモンへの指令をシャットダウンします。そして飲み薬でも男性ホルモンが出ないようにします。しかし、同時に副腎皮質ホルモン（ステロイド）も不足しますのでステロイド剤も服用します。抗がん剤で

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター招へい教授；ishikura.f@gmail.com

はありませんので比較的副作用が少なく、現在も特に問題なく服用しています。

幸いにもこのホルモン療法は効果があり、骨の転移も少なくなり、PSAも1くらいまで下がってきました。今頃はこの世にいないはずだと思っていましたが、このようにコラムを書く機会をいただきました。最新の論文では、この治療により平均的に3～5年ぐらいは何とかもつようです。そのため私は自分のことを「1000日ぐらい生きる医師」と称しています。

全身の骨に転移をしていても、末期癌ではなく、私はがんと共生していると思っています。一般に骨に転移していると運動はしない方が良いのですが、前立腺がんの場合は骨がもろくなるわけではないので、主治医から運動を勧められました。そのためテニスを週3～4回、毎日の園芸、週1度くらいの釣り、月に2回のハイキングで忙しく暮らし、がん患者と思えないくらい日焼けをしています。

本年の2月の後半に全身の骨に転移した前立腺がんが見つかったのですが、主治医によると、かなり前（2～3年前）からあったと思われます。つまり2～3年前はがんとは知らずに生活し、ある日突然がんの診断を受けて患者となったのです。私の外来患者さんでも、定期検査のレントゲンで、肺に丸い影が見つかり、精密検査で肺がんと診断されることもあります。腎臓を検査するつもりの腹部超音波検査で肝臓にがんが見つかることもたまにはあります。このような場合は患者さんにがんの症状はなく早期発見できてよかったねという状態です。おそらくどちらの場合も1～2年前からがんらしい兆候が見られたと思われますが、検査で診断した場合に突然がん患者となるのです。つまり多くのがん患者は無意識にがんと共生している時期があるのです。

健康な人でも1日にがん細胞が数千個発生すると言われています。細胞分裂の際に何かの間違いでがん細胞ができるようで、その確率を上げるのがタバコや放射線です。最初のがん細胞はバラバラなので、我々の免疫、特にNK細胞という免疫細胞がやっつけて大きく

なりません。ストレスなどで免疫機能が落ちると、毎日できるがん細胞が生き残り、増加して検査で発見されたときに診断されます。

高齢者にがんの多い理由はがん細胞が発生しやすいことや免疫系が弱っていることにあるようです。最近、がんは2人に1人の病気と言われていますが、超高齢社会によってがんになりやすい人が増えているだけなのです。昔は不治の病であったがんも治療が飛躍的に改善し、多くの患者さんが完治もしくは寿命を延ばすことができるようになりました。そのためにがんを患っていても、他の病で死ぬことも珍しくありません。特に流行している新型コロナウィルスやインフルエンザで命を落とす可能性もあるでしょう。

がんに限らず動脈硬化性の病気である脳卒中や心筋梗塞なども徐々に進行し、ある日突然動脈が詰まって発症するのです。やはり病気の予備軍として共生しているともいえます。60歳を過ぎてくれば表面上は健康だと思っても、何かの病気と共生している可能性は少なくありません。

さて、私はがんの宣告でかなりショックを受けると思っていましたが、約10年前から山中教授とともに生き方や死に方に関する勉強会を開催してきました。その中で社会学者や宗教家から多くのことを学びました。そのために死ぬことに関して大きな悲壮感はもっていません。むしろ長生きすることの方が恐ろしいと感じています。人生100年時代と言われていますが、人間は60歳まで生きれば上出来、60歳以上はおまけの人生と考えて、なるようにしかならないと私は思っています。皆さんはどう考えでしょうか?